



第一回企画展
—稲作と信仰 神像展—風景

日吉の森季刊誌(夏)



日吉の森庭園美術館

〒223-0064

横浜市港北区下田町3-10-34

TEL045-561-3214

1 現在も残るお盆の風景

季刊誌(夏)として発表するにあたり、田邊家の一大行事であります“お盆”を取り上げることいたしました。

色々な風習があるお盆ですが、田邊家のお盆というものは後述するものとなっております。それが、「曹洞宗のやり方と違う」とか、「本来のやり方ではない」等あるとは思いますが、田邊家としてこの地で400年行ってきた事を表記してみました。

全国的に残る風習の一つに”お盆”があります。しかし実際にはその仏事について漠然と捉える事が多く海外旅行や、帰省のラッシュばかりがクローズアップされています。首都圏のベッドタウンである、ここ横浜市港北区下田町においても都市化や住民の入れ替わりが行われ、田邊家のように僧侶を招いて柵経(お経)をあげる家は真福寺においては10件に満たないとの事です。

それでは実際に首都圏にある田邊家(以下当家)を一例としてどの様なお盆行事を行っているのか、一般的なお盆と比較して紹介していきます。

目次

● 現在も残るお盆の風景	1
● よく行われるお盆のスタイル	2
● 解説	2
● 所見	3
● 田邊家のお盆	4~5
● 終わりに	6

2 よく行われるお盆のスタイル

お盆とは祖先の霊を祀る(まつ)ために7月15日頃に行われる行事です。お盆は仏教行事のひとつと位置付けられていますが、仏教の盂蘭盆(うらぼん)・盂蘭盆会(うらぼんえ)の行事に、祖先の霊を祀る(まつ)信仰が次第に混ざっていったものという考え方もあります。

初盆には四十九日、一周忌、三回忌などの法事法要とは別に、法要として供養の儀式が営まれますが、初盆以外のお盆には、遺族だけで、祖先の霊と一緒に供養するのが一般的です。

現代では、一般的に「お盆とは、年に一度祖先の霊が私たちのもとに帰ってくる期間」とされ、迎え火を焚いて祖先が迷わず当家に来られるようにしてお迎えし、戻ってきた祖先の霊の供養をします。やがてお盆の期間が過ぎると送り火を焚いてお送りします。この風習がお盆の風習として定着しています

企業などもお盆の期間(旧暦の7月15日頃、現在の8月15日前後)を夏期休暇としていますが、これは、江戸時代に小正月(1月15日)とお盆(7月15日)の2つの時期を商家が「藪入り」(やぶいり)とし、奉行人たちに実家に帰る休みの日としていたものが、盆休みとして定着してきたものです。

地獄の鬼たちもお休みですから、下界の人々も休めということでしょうか。



よく見られる飾り方

- ①そうめんまたはうどん
- ②さやつきの豆(十六ささげ)
または昆布
- ③ホウズキ
- ④お花
- ⑤きゅうりの馬、なすの牛
- ⑥水の子
- ⑦灑水盤
- ⑧夏の野菜 果物

3 解説

①そうめんまたはうどん

仏様が帰る時に、荷物(おみやげ)を背負う紐になる。荷綱や手綱になる。喜びを細く長く縁起をかついだものである。・七夕(針仕事の上達を願う祭り)に そうめん(糸に見立てられ供物とされていた)が備えられていた習慣がお盆に引き継がれたもの。1つは、お土産の包みを結わせるのがそうめん、それを背負うのが十六ササゲという具合に、丈夫な綱にたとえられている。という説があるようです。すぐに食べられるように茹でてあるものも供えます。

②さやつきの豆(十六ささげ) または昆布

キササゲという木の代用として十六ササゲが使われたようです。昆布はおなじみの“よろこんぶ”。

③ホウズキ

精霊棚や仏壇の前に、ほおづきを下げ地域があります。ほおづきは鬼灯とも書かれ、死者の提灯であるともいわれています

④お花

盆花(ぼんばな)とは、精霊棚に飾る花をいい、生花と造花があります。生花では桔梗、撫子(なでしこ)など秋の花が主になります。

⑤きゅうりの馬、なすの牛

お盆の時に、キュウリの馬と、ナスの牛を供えることがあります。これは先祖の霊が、馬に乗って一刻も早くこの世に帰り、牛に乗ってゆっくりあの世へ戻って行くように、との願いを込めたものといわれています。真菰(まこも)で作られた馬と牛を供える場合も多いです。また、先祖の霊がキュウリの馬に乗り、牛には荷物を乗せて楽に帰れるように、という意味が込められているともいわれています。

⑥水の子

ナスやキュウリ、カボチャなどを賽の目に切り水鉢や蓮の葉や里芋の葉の上に供えたものを水の子と呼びます。地域によってはこれに洗米を加えます。この水の子はアライアゲ、アラゲ、ミズムケなどと呼ぶ地域もあります。水に浸すのは「ご先祖様ののどが渇かないように」と考える地域もあるようです。水の子の「水」は浄化する力があります。亡くなられた方に供える水のことは「水向け」と言われるように、様々な精霊を浄化し供養する役割が「水の子」にはあります。

⑦灑水盤

間廻水(あかみず)ともいうようで水鉢に水を浅くはっておいてお清めに使うようです。

⑧季節の野菜

果物 スイカやかぼちゃなど傷みにくい季節物をかざるようです。

以上は部分的に補足してありますが、インターネットの仏具店ホームページより抜粋

補足ですが、日本民族学概論(宮田登・福田アジオ編/吉川弘文館によるとお盆には収穫儀礼の意味もあるそうで一部抜粋すると、

「小正月に麦の儀礼があるなら、これに対する収穫儀礼があると考えるのが当然であろう。

麦の儀礼であげた群馬県大塚では盆棚にウドンを生のまま掛け、また麦殻を束ねて置く盆の18日を麦休みといっている。」とあります。麦の収穫時期は7月～8月なので、そうめんやウドンは収穫したものを神様にお供えし感謝する意味もあったようです。場所によっては里芋だったりもするため、お盆のお供えについては、地元の産物が備えられるケースも多いようです。

4 所見

どのお供えももっともらしい理由付けがなされています。これからは私の見解ですが、村社会の中でよそに行き、恥をかかないようにとか、間違えると知識が無いように思われるなど、冠婚葬祭には非常に気をつかいます。これは故人や祖先に対しての失礼ではなく、その行為を正しいとしている人たち、つまり集まって仕切っている人たちに失礼だという見方です。決して故人や祖先が、「そのやり方は止めてほしいとか」「帰りはゆっくり帰りたいから牛にしてくれ」などと言った事実はないのです。例えばお葬式は故人を送るその敬意の払い方、そしてお盆は自分のルーツとなった人々を偲び敬う時間をいかにして創造したかを表しているようです。

また子供のころから、

- ・お盆に殺生をしてはいけません。
- ・生臭いもの(魚や生肉など)は食さない
- ・お盆には海に入らない

などの注意をうけました。地獄の釜の蓋が開き、亡者がこちら側に戻ってくる際に、無縁仏やたちの悪い祖霊が悪さをするという意味だと思われそうですが、これもその当時根拠が分からず、ただ怖かった思い出です。夏は食品が傷みやすかったり、土用波で波が高かったりするために、このような教えがあったのだと推察されます。

当たり前の事ではありますが、そういった考え方を忘れて、ただ形式や商業主義にはしり形骸化した宗教ほど醜いものはないと思います。



田邊家のお盆の飾りつけ
奥の仏壇は閉める。中央にはご飯とみそ汁を置く

どこかの神社では本殿の建て替えの費用として配下の神社にノルマを決めて寄付を請求するというシステムを聞いたことがあります・・・。

というわけでこの飾り方が絶対というものは存在しないようです。お盆はあったこともないご先祖様をお迎えるのですから、当たり障りのない果物や花を飾るのが無難と考えたのでしょう。

次は田邊家のお盆を紹介します。

5 田邊家のお盆

400年続く田邊家のお盆とは

提灯やお供えなどの飾り付け 新盆では提灯をもらう習慣があります。現在5つあります。

お花・きゅうりの馬、茄子の牛 水の子(茄子と胡瓜をさいの目に切り、そこに生米を和えたものを蓮の葉の上にのせたもの) 灑水盤(絵ではこの盤にミソハギがあるが、当家では水の子にのせている。)夏の野菜 果物ここまでは一緒。

まこもを編んだ敷物を敷きその上に接待用のごはんと味噌汁を置く(上の写真はごはんを置く前)。

しかしそうめんうどんは消え豆も消えホウズキ、や周りの竹の結果も簡略化されています。田邊美紗代(現館長)の幼少時にはまだ立てていたということですから、何かのきっかけで設置しないようになったようです。

また盆棚の下には無縁仏に対するお供えと盆棚上中央に祖先に対するごはん味噌汁が配置される。これは、うどん、そうめんに変わるものだと考えられます。また後ろにある仏壇の蓋は閉めるようにしていました。これは位牌のご先祖ももつと昔のご先祖様も等しくお迎えするからのようです。気を使います。



一番大事な位牌についても中央上段には置き入れないため(数が多い)過去帳(祖先がいつ亡くなったか書いてあるもの)が配置されている。



迎え火の配置

お盆開始

お盆の朝はお坊さんが棚経をあげに来る前に迎え火を行います。これは、出来るだけ早く祖先の霊に帰ってきていただく思いが込められます。水の子と灑水盤、ロウソクとお花をもって迎え火の場所つまり自宅敷地の入口に近い場所に竹を切ったものを3本(写真参照)お花を両脇に、お線香が真ん中としている。これは竹の節をうまく使うもので、切るときに少し考えて節を調節します。

おがら(葉だつたりもする)を下の方(つまり敷地の端に近い方)で燃やしご先祖様や無縁の方々を招きます。これは、迷わないように目印にするそうです。

その後、お線香に火を点けお線香を立て拝みます。そして灑水盤の中にあるミソハギを水の子と三回ほど往復させ、その後また拝礼を行います。これで迎え火は終了です。この行為はお清めだと考えられます。

僧侶による柵経

お経の内容については、今回は取り上げませんが、お坊さんが見えた時は家族揃って丁重に迎え、昔はお酒を出す習慣もあったようです。長いお経に、子供の頃はうんざりしたものです。そして、家長が僧侶をもてなし世間話や故人の思い出を語り終了です。約40分～1時間程度



田邊家の柵経風景2015年8月 13日

灯明

夜は、お墓に行きロウソクで灯明を行います。誰もいなくなったお墓を守るそうです。子供のころはお墓が怖くてしょうがないのに、さらに夜のお墓に行くということで、とても恐ろしく感じたものです。それは、かなり大人になっても一緒でした。祖父が2013年に亡くなりましたが、祖父は厳格な人で大人になったわたしでもよく叱られていました。霊となった祖父はどのようになってしまうのか、通夜の夜に生き返って起き上がってこないかと恐れを抱いていました。

しかし美術館事業のパートナーであった父光彰が亡くなった際には、一切の霊に対する恐怖が消えました。来世があると信じる事が出来る事実があれば救われると思ったのです。

親戚も昔は多く訪れお盆に旧交を温めていましたが、高齢化と次の世代のつながりが消えていく今日では、訪れる人も減ってしまっているのが現状です。

送り火

いよいよお盆も終盤です。

帰りはゆっくり帰っていただくので茄子で出来た牛にそうめんやお米を背負わせ飾ります。そして出来るだけ長く居ていただくため、夜に行きます。当家では20時頃行きます。

迎える時とは違い、門から遠い場所におがら(葉なども)を燃やし送ります。この際その煙で頭や身体をこすり、無病息災を祈ります。また、ナスや胡瓜で身体の悪い部分をこすると、お土産と一緒に持っていつてくれるそうです(小学生の頃できたイボをこすったところ何日かで無くなったのには大変驚きました)。そして迎え火の時に行ったお線香と三回のミソハギの動きを行い終了です。

この後、家に入るまで振り返ってはいけないと言われた事が、当時小さかった私にとっては恐怖で、どの程度まで身体をひねることが振り返ることなのかを考えてしまい、体が硬直してしまいました。これは、霊たちが名残惜しくなって、そこに留まってしまうのを恐れたためと言われています。

すべてのものに意味がありますし、簡略化された部分も多く見受けられる現代ですが、何が大事なことなのか、所作や形式でなく、何を思うかが最も大事な部分であり、自分が突然この世に生まれたのではないことを考えさせられるとても良い機会であることは申し上げるまでもありません。

以上
学芸員 田邊陵光

— 終わりに —

台風の近づく青空の高いある日

私は何気なく田邊泰孝記念館の窓から田辺光彰美術館の屋根の上に視線を抜けて美術館の向こう東側にある竹林を眺めていました。

南の方から風が当たると一斉に北の方へ抵抗することもなく竹がしなりそれに伴って房状の葉が頭をかしげるかの如く動きます。

風が治まると一本一本がバラバラに元に戻る。

まるで美術館の屋根を舞台にして踊っているようでした。

天安門事件の後まもなくして中国三名山の一つ黄山に登った時、二泊目の宿の裏手に大きな御影石が連なっていてそれらを舞台にとおり雨が雲となって左から右から湧いて出てくる。そしてずっと全てが舞台そでに引っ込んでしまうと又別の場所から湧いてきて五分位舞い続け引っ込むという様な場面が一時間位続きました。

日本で高校卒業迄過ごし家族そろって帰国した知人の催さん(四十才位の男性)が上海からご一緒してくれたのです。御影石にかじり付くように生えている松山をのんびり見ていると突然の雨 私達四人以外の人達は皆宿に入ってしまった。

私達三人もあわてて宿の方へかけ込もうとした時催さんが「入ってはだめですよ。これからが素晴らしいのです。めったに見られませんよ」と引き止めてくれたお蔭で私達日本人は幻想的で美しいショーを楽しむ事が出来たのでした。

良い思い出は気持をやさしくしてくれます。謝々

館長 田邊美紗代

